入社して、2週間、これから本格的に海運の仕事をしていくにあたって、今回カメリアライン株式会社のご厚意で博多の国際旅客ターミナルにて船積みの一連の作業を見学させていただいた。

2015年4月10日金曜日の朝、羽田空港を出発し、博多空港に到着したのが昼前であった。この日はあいにくの雨であったことに加え、船の出港時刻が12時だったために，船積みの作業を見学する事は出来なかった。

そのため、博多1日目はカメリアライン株式会社の方々と食事を交えながら、いろいろとお話を伺うことになった。

博多から釜山まで船であれば6時間弱で行けるという事であったので、多くの観光客はもちろんのこと、朝、韓国から大量のダンボールを持って、日本を訪れ、その日のうちに韓国へと帰っていく「ぽったりさん」と呼ばれるような人も多いのだという。たくさんの荷物を持ち込むことができるということも魅力である大きなポイントの1つであると考えられる。私がターミナルを訪れた時は、人が少なく、静かな空気に包まれていたが、年間60万人以上が利用する港であり、とりわけ、韓流ブーム全盛期の頃は多くの人が利用していたと言う。

博多と釜山を結ぶ『ニューかめりあ』は週6便のペースで行き来する、人気の高いフェリーである。また、「かめりあ」という船名は釜山広域市の市花である椿(camellia)、そして、博多の市花、山茶花が椿科だということから二つの市を繋ぐといった意味で名付けられたのだと言う。

西日本一の歓楽街で名高い中洲、一説によれば新宿の歌舞伎町、札幌のすすきのと合わせて日本の三大歓楽街ともいわれている。たしかに実際行ってみるとクラブや居酒屋、夜のお店がこれぞとばかりに集結して賑やかなのである。また所謂『飲み屋』に限らず、それなりに格式の高い料亭も中洲には存在する。私が訪れた魚あん三田は有名な某落語家も訪れるという名店である。そこでは呼子港で取れた巨大なイカの活造りを頂いたのであるが、店の雰囲気も含め非常に奥ゆかしい店であった。

また、なんといっても博多の最強の魅力は「人」である。私も含め多くの日本人が所謂「元気な日本人」を思い浮かべるとなるとまず大阪ではないだろうか。博多に行けば、その考えは覆される。博多人はまず男性も女性も黒目が大きく、有名人に福岡出身の人物が多いというだけあって、端整な顔立ちをした人が非常に多い。福岡人の魅力は顔だけではない、よく言えば「非常に元気である」しかし、私みたいに引っ込み思案な人間からすれば痛い目に遭いかねない。あまり書くと反感を買いかねないが、東京で「普通だったら公の場で控えるようなことも

福岡人だと軽いノリでやってしまうといった印象を受けたものである。それでも私自身、持ち合わせていないようなものを持っている感じがして非常に憧れるものがあった。

博多2日目は朝からまたカメリアライン株式会社の事務所を訪問し、やっと船積みの現場を見学させていただいた。幸いにもこの日は天候にも恵まれ、絶好の港の見学日和であった。

『ニューかめりあ』には前と後ろにそれぞれ RAMP WAY(車輌を積み下ろしするために用いられる船倉から港の岸壁に伸びる道)があり、まず船の前方の RAMP WAY からトレーラーに載せられたコンテナがトラクターに引っ張られて入っていく。

あらかじめ船倉にはトレーラーからコンテナを降ろすための大きなフォークリフトが待機しており、テンポよく作業がすすめられていく。一見、単純な流れ作業のようにみえるが、一歩間違えれば、大きな事故につながる作業であるがため、高度のスキルが求められるのである。

写真の作業が繰り返され、どんどん船倉にコンテナが積みこまれていく。カメリアの方曰く、船倉の中心にコンテナが置かれていき、その周りに重機が置かれるということである。

コンテナを降ろしたトレーラーはトラクターに引かれ、そのまま船の後方の RAMP WAY からでていくのである。ちなみに『ニューかめりあ』の RAMP WAY は高さ5.0メートル、重さ60トンの車輌に耐えられる強度であるがため、あらゆる貨物の輸送に対応しているとのことである。

続いて案内されたのが、船の外にあるコンテナ・ヤードである。見ての通り、有名な船会社の名前があちらこちらに見受けられる。右上の写真で見られる

ような所謂一般的なコンテナ以外にも、下の写真のような電力を用いて冷蔵・冷凍するコンテナ(Reefer Container)などもある。

仕組みは実に簡単であり、コンテナの端にソケットのようなものが付いてあるのが見えるが、これが所謂コンセントみたいなものである。港で置いている間はこの部分から電気が供給され、コンテナが船積みされた後は本船から電気が供給される。

コンテナ・ヤードに搬入された大量のコンテナは写真のようにしてトラクターに積まれる。

この作業も、高度のスキルが問われる作業ではあるが、万一の場合に備え、トラクターの運転手は、車から降りて、コンクリートに書かれた白い円の中で作業が完了するのを待機するという決まりがあるのだという。停車中のトラクターにコンテナを担いだストラドル・キャリアーが接近する。

実にテンポよく、作業が行われ、準備は完了である。そしてこのままこのコンテナを載せたトレーラーはRAMP WAYを通って、船内に運び込まれるのである。

私が驚いたのはストラドル・キャリアーのキャビン(操縦室)が高いところにあるにもかかわらず、コンテナを固定するトラクターの固定具がものすごく小さいということである。

この三角の形をした突起のようなものをかぶせると、その部分がクルっとまわり、固定される。ここまで小さい固定具に高いキャビンから一発で決められる操縦士の作業は圧巻である。

まさにプロこそがなせる技である。これから海運の仕事をしていく上に当たり、やはりどうしても本や人の話では、理解であったり、感覚であったりというものは、限界があるものである。

今回のように、実際荷積みの場に立ち会い、見学させて頂けたということは今後につながる大きなモチベーションにもなり、また、どれだけ多くの職種の人々が港に携わっているのかというのも知ることができるきっかけとなった。

普通であったら、こんなに間近な距離で、ましてや丁寧な説明をして頂きながら船積みの現場をいろいろ教えていただくということはまず無理であったに

違いない。カメリアライン株式会社の皆様のご厚意に、心から感謝の意を述べさせて頂きたい。

その日の午後は、博多の駅周辺を散策してみることにした。

博多は大きい都市でありながら、アクセスに関しても実に便利な場所である。福岡空港から博多駅までは地下鉄でわずか 5 分である。また東京と同様に地下鉄が普及しているので、ちょっと出かけるにしても割と便利である。

博多駅には現在 JR 博多シティという新しい駅ビルが隣接しており、アパレルストアやレストラン、映画館といったあらゆるテナントが入り、多くの観光客で賑わっている。

私が受けた印象としては、博多はもしかして、こういった観光客目的の商業施設に今でも、ものすごく力を入れているのではないだろうかと考える。

駅構内には福岡の名産品の数々がこれでもかというばかりに売られている。なかでも一際目を引くのがやはり明太子である。

駅構内にはたくさんの明太子販売店があり、そういった販売店ではお手頃価格なものから、高級なものまで、ありとあらゆる明太子を大量に店先に揃えている。これだったら、ありとあらゆる客のニーズに応える事も可能であるはずである。如何せん、これだけ大量の明太子が売り場に揃えられていたら、正直、気持ち悪い。

博多駅および JR 博多シティは勿論のこと、博多駅周辺にはビジネスホテルやビルが立ち並んでいる。その 1 つにヨドバシカメラが挙げられるが、さすが日本のヨドバシカメラというだけあって、この日も多くの中国人観光客を目にすることとなった。このヨドバシカメラは 6 フロアからなっており、駅の真正面であるにもかかわらず、大きな立体型駐車場も設備してある。

もともと郊外出身の私からしてみれば、日本全国の大きな都市には必ずといっても良いほど、駅前に大きな電化製品店のビルが見受けられる。東京都に関しては、新宿や秋葉原など都内の大きな街であればほとんどの駅前もしくは駅の近くに大きな電化製品店のビルがある。昨今は前述したように中国人の観光客らが日本に訪れた際、いわゆる『爆買い』と呼ばれるような買い物をしていく光景が有名ではあるが、まさか日本全国どこに行ってもその光景を見ることになるとは思ってもいなかった。

『JR 博多シティ』内には現在、『デイトス』と呼ばれる商業施設が存在する。『デイトス』は 1975 年に博多の 1 号店オープン以来、九州に計 3 か所開業したものの、現在はこの博多駅にある 1 号店のみが営業を続けている。この施設はアパレルや土産物市場などで充実した施設となっており、観光客は勿論のこと、地元の人も楽しめる場所であるといえる。そのなかでも、一番の目玉は博多めん街道である。ここには shin-shin をはじめ、博多ラーメンと言えばといわんばかりの人気ラーメン店が集結している。ただ、今回の出張で地元の人と話してわかったことは、博多の人間はさほど博多ラーメンを食べないと言う事である。カメリアの方曰く、もともと博多ラーメンというものは手頃な価格で頂けるものであったというものの、某有名博多ラーメンのチェーン店が東京に進出したあたりをきっかけに『博多ラーメン』がいわゆるブランド化されはじめ、割高な価格での提供がはじまったのだという。博多人曰く、博多の人間はラーメンよりもうどんを食すことが多いという。博多のうどんの最大の特徴というものがコシのない、ふわふわの麺なのだという。果たして、そんなものが美味しいのだろうかというのが率直な考えではあるのだが、如何せん、私は試したことがないので、なにもいえない。

博多の駅から歩いて間もないところに祇園という場所がある。祇園と聞いて、私がまず思い浮かぶのは京都にある祇園である。ついでを言えば、私の出身地、千葉県木更津市にも祇園という場所が存在する。祇園と聞けば多くの人が京都にあるような古風で粋な街並みを思い浮かべるのではないだろうか。博多の祇園もまさしくそういった場所である。規模は京都に比べると、敷地も小さく、あのどことなく敷居の高いイメージも薄いが、趣のある神社、仏閣等が存在する。なんといってもまず挙げられるのが東長寺である。東長寺には、福岡大仏という 10 メートルを超える巨大仏像が存在する。たしかに 10 メートルと聞いてもしっくりこないが、例えを出すとすれば、鎌倉の高徳院にある大仏が約 11 メートルである。鎌倉の大仏は屋外に鎮座しているが、博多の福岡大仏は東長寺の本堂の屋内に鎮座している。いざ、参拝をしに、訪れると、その迫力に圧倒されるものである。それ以外にも境内には五重塔や、たくさんの地蔵が並んでいたりするなど、大きな敷地をもつお寺である。調べてみるところによるとこの東長寺はかの空海が日本で初めて創設した寺なのだという。

その他にも厄除けで有名な若八幡宮や枯山水が奥ゆかしい承天寺など見所溢れる地である。

興味深いのが、こういった仏閣等集結はしているものの、所謂都会的な街の隅にポツンとある感じなのである。京都にあるような祇園というのはもうその場所全体が古風な感じをプンプン漂わせているのだが、博多の祇園は異質である。大袈裟に言ってしまえばまるでパラレルワールドなのである。

その他、博多の神社でぜひ足を運んでいただきたいのが、川端の商店街にある櫛田神社である。ここは少々わかりにくい場所にあるにもかかわらず、たくさんの観光客で賑やかな神社である。この神社には写真を撮らずにはいられないような目を引く建物や像などが目白押しなのである。

そのうちの１つに飾り山と呼ばれるものがある。

飾り山というのは簡単に言えば、たくさんの人形が乗せられた10m近くある高い神輿であるが、本来は祭りが終われば、取り壊されるものなのだという。しかし、祭り以外の時期も、訪れる多くの人に見てもらいたいという考えから、櫛田神社では常設展示を行っているとのことである。この飾り山に飾られている人形は一体一体プロの人形師の手によってつくられたものであり、人形が山に飾り付けられる際も、人形師の指示により、飾り山がデコレーションされていくのである。

そもそもこの櫛田神社、櫛名田姫という人物を祀っている神社であるが、この櫛名田姫というのは日本の有名な神話にでてくる人物のことである。櫛名田姫というのは八岐大蛇を退治した英雄の恋人なのであるが、その英雄が八岐大蛇と戦う際、櫛名田姫は自分が食べられないように、櫛に化け、恋人の髪に乗って共に戦ったという神話である。

ただこの櫛田神社という名前の神社が日本各地に何か所かあり、だいたいどの場所でも櫛名田姫に何かしら纏わる事があるみたいである。一説によれば、博多の櫛田神社には元々櫛名田姫を祀っていたにもかかわらず、いまではもう祀られていないという説もわりと有力なのだという。

櫛田神社のすぐ近くにある上川端商店街も大変情緒ある雰囲気の場所である。上川端商店街はホテルオークラのすぐ近くにあり、わずか５分か10分で行けるほどの距離である。商店街の入り口には中洲川端駅の出口もあり、アクセスの面でも大変便利であると言える。厳密にどこからどこまでが商店街なのかということは、私も定かではないのだが、この商店街にはアーケードつきの典型的な商店街のほかに、アーケードのない昔懐かしい感じが漂う飲み屋街も存在する。

上川端商店街のすぐ隣には『キャナルシティ博多』というある種の商業施設がある。CANAL(運河)と名付けているぐらいなのだから、もしかしてこの場所にかつては運河があって、栄えていた場所なのではないかと推測したのだが、残念ながら、どうやらこの名前の由来というのは、ただ単にこの商業施設に疑似の運河が造られていることから来ているようである。

しかし、実際調べてみると、博多にはかつて博多大水道という小さな運河が存在していたという事実があったみたいなのである。そもそもは、江戸時代につくられた下水道が発端であり、後にそれが博多川と石堂川を結ぶ人工水路になったとのことである。明治時代にはここに大きな石蓋がかぶせられて、道路が造られ、大きな商店街が存在したこともあるのだという。そして、今現在そこがどうなっているのかというと、ホテルオークラ博多が建っているのである。実は、私自身、博多に訪れた際、ホテルオークラに宿泊したのであるが、そういった歴史的背景は全く、記されていなかった。以前、静岡を訪れた際の話しであるが、昔、二丁町遊郭があった場所が今現在どうなっているのかというと、そこは地震防災センターになっているのである。それでもそこになにかしらの説明書きがあればと思い、訪れたのだが、やはり地震防災センターをやっているだけあって、そこが昔遊郭であったという歴史的背景の説明を置くわけにはいかなかったようなのである。博多の場合、決して、疚しい歴史的背景があったわけでもないのにかかわらず、そういったことは記されていなかった。東京都内を歩いているとよく文化財や名所に歴史等について説明されたボード等が設置してあるのを目にする。多くのいわゆる歴史好きの人々は実際にその場所を訪れ、こういった説明を読み、再認識するのが主流であり、私自身、歴史を知るうえでは最も健全なやり方なのではないかとも感じる。その点、東京都内とりわけ日本橋界隈はこういった設備が整っており、すごく力を入れているようにも窺えるが、今回、博多を歩き回った私の感想として、博多はこういった文化財等に力をもう少し入れても良いのではないかというのが、率直な意見である。なぜなら、今回、本レポートで書いた場所などは先にその場所を訪れ、印象に残ったものを写真に収め、帰ってきてから調べるといった、ある種の「後付」みたいなやり方なのである。当たり前のことではあるが、博多にもその土地ならではの貴重な歴史や、面白い事実が存在しているはずであり、なおかつ、今現在、博多というのは日本でも5本の指に入るぐらいの大きな都市でもあるのだから非常に魅力的な場所なわけである。海運の仕事をはじめるにあたり、私は日本各地の港町や大きな都市を回ってみたが、博多はとりわけ博物館等の施設が少なかったのではないかという印象も受けている。

前述したように、中洲や、運河にまつわることなど深く掘り下げていけば、絶対に面白いものが博多には満ち溢れている。

帰ってきてから、写真を見返し、ネットでいろいろ調べる。こういう形で博多のことを知ると、なぜかもっと回っておきたかった場所が出てきたり、掘り下げて探究したいことが増えたりなど、もう一度行って確かめたくなるのである。それは博多の魅力ゆえのことかもしれないが、いくらなんでももう少しこういったところにも力を入れてみても良いのではないかと感じる。

今更ながら、私にとって、今回がはじめての博多であり、はじめての九州でもある。というのも、恥ずかしながら私自身これまで全くと言って良いほど、遠く外に出ていくことが少なかったもので、色々な意味で今回の出張は私にとって刺激的な旅となった。

今後は一営業マンとして、日本全国いや世界を股に飛び回れるような仕事人になりたいと考えており、そのためにも各地の風土であったり、人間性であったりを知り、その土地その土地の人々と仕事だけに留まらず、広い意味で人間関係を構築していくことが出来たらと考えている。

そうすることによって、きっと仕事もスムーズにいくであろうし、やりやすくなるのではないかと信じている。

もともと無口で人見知りをする人間なので、いっぱしの営業マンになるにはまだまだしごきが必要になるとは思うが、それでも前述したようなやり方で仕事をしてみたいし、そもそもそういうやり方が向いている人間だとは自負しているので、今後も色々な場所に出向き、ありとあらゆる人間に対応できたらと思う。

ウェバー伊安